

一 般 演 題

1. In-111 による血小板標識における各種キレート剤の影響について

三重野正之	井坂 吉成	松本 昌泰
鎌田 武信		(大阪大・一内)
木村 和文	(同・バイオメディカルセ・ トレーサー情報解析部)	
上原 章	橋川 一雄	柏木 徹
小塚 隆弘		(同・中放)

In-111 oxine, tropolone, 2-mercaptopyridin-N-oxide (Merc) による血小板標識の至適条件を、血漿存在下と非存在下で検討するとともに、このような条件下での In-111 血小板の血小板凝集能を非標識血小板の凝集能と比較検討した。PRP 250 μ l, 血小板数 $3 \times 10^5/\mu$ l の血小板濃度で、血漿非存在下, 存在下での至適終濃度は、oxine, tropolone, Merc の順に 16, 32, 16 μ M, 32, 500, 64 μ M であり、標識率はそれぞれ 85, 90, 94%, 20, 33, 44% であった。血小板数を $4.8 \times 10^6/\mu$ l にすれば、血漿存在下の標識率はそれぞれ 50, 83, 92% に増加した。凝集能は血漿存在下で標識したものが良く保たれ血小板標識には Merc が最も有用と考えられた。

2. 特発性血小板減少性紫斑病 (ITP) における血小板動態について

井坂 吉成	三重野正之	松本 昌泰
鎌田 武信		(大阪大・一内)
木村 和文	(同・バイオメディカルセ・ トレーサー情報解析部)	
上原 章	橋川 一雄	柏木 徹
小塚 隆弘		(同・中放)
倉田 義之	古林 孝保	(同・二内)

ITP 12 例を対象に In-111 血小板による血小板寿命 (multiple hit model, weighted mean 法), 肝, 脾における血小板の取り込み (geometrical mean 法) を計測し比較検討した。末梢の血小板数と血小板寿命の間の相関は

multiple hit, weighted mean model においてそれぞれ, $r=0.82, 0.75$ であり良好であった。血小板寿命および血小板数と肝, 脾の放射能を比較すると、逆相関の傾向はあるが有意ではなく、血小板の取り込みはそれぞれの症例により異なっていた。血小板寿命, 血小板数と有意の逆相関のあるのは、肝脾両者に取り込まれた放射能の総和であり ITP の病態を考える上でこのことは重要な点であると考えられる。

3. 腹部大動脈瘤における血小板シンチグラフィーの有用性に関する検討

恵谷 秀紀	前田 宏明	多賀谷昌史
金 奉賀	中 真砂士	木下 直和
額田 忠篤	(国立大阪南病院・循科・臨研部)	
宇治 茂	松岡 利幸	(同・放)
北川 一夫	井坂 吉成	(大阪大・一内)
木村 和文	(同・バイオメディカルセ)	

腹部大動脈瘤における血小板集積の有無を In-111 血小板と Tc-99m 人血清アルブミン (HSA) を用いた 2 核種シンチグラフィーにて評価した。

対象は腹部大動脈瘤を有する 10 例である。本検査に先だって全例血小板機能に影響する薬剤は少なくとも 1 か月以上前より服用していない。

血小板シンチグラフィーは In-111 tropolone で標識した自家血小板を用いた。In-111 血小板投与後 48 時間で血小板シンチグラムを撮像後、Tc-99m・HSA を静注し、同部位の血液プールシンチグラムを得た。シンチグラムの診断は In-111 血小板, Tc-99m・HSA の両シンチグラムを比較し、前者の放射能が後者のそれよりも明らかに高い場合を血小板集積陽性とし、後者の放射能と明確な差を認めない場合を陰性と判定した。

本 2 核種シンチグラフィー検査を行った 10 症例では血小板集積陽性は 9 例に、また残りの 1 例は equivocal であり、非常に高頻度で血小板集積が認められた。

以上より、本法は腹部大動脈瘤内における血拴形成能 (血小板集積) を評価する上で有用な方法と考えられた。